



ズフタ——宿主を「完璧なメス」へと誘う 乳房共生体 (体験版)

- 著者: あれぐろもと @AllegroMoltoV
- 表紙イラスト: ハル @haru04021992

- 発行日: 2026 年 2 月 12 日
- 版: 第 1 版

「あなたも、もっと美しくなりたいでしょう？」

乳房に宿り、肉体と精神を「進化」させる謎の共生生物・ズフタ。宿主に絶対的な幸福感と性的快楽を与える代償に、少しずつ「完璧な雌」へと改造していく——

本シリーズは、ズフタに感染した人間たちの変異と陶酔を描いた官能SF群像劇です。美容クリニックを起点に広がる感染、歪んだ幸福に溺れる妻たち、そしてその裏で蠢く研究機関の思惑。最新医療と肉体改造、背徳的な快楽が交差する世界へようこそ。

目次

- [Zuftha lactovora に関する観察記録報告書](#)
- [違法な膨乳改造医療によって変わりゆく妻——何も知らない夫は変化を受け入れながら濃厚な性生活を送る](#)
- [違法な膨乳改造医療によって変わりゆく妻2——妻の友人との不倫、そして、3Pへ](#)
- [母の乳改造のせいで家中乳臭いのをどうにかしたく元凶の医療現場に潜入するも自身も乳悦に堕ちる母娘モノ](#)
- [性経験0だった女子校生が新興宗教の『授乳式』参加をきっかけに友人ともども堕ちていく連鎖堕ちモノ](#)
- [シスターとなった女が『授乳式』を通して世界に“救済”を広めていく話](#)
- [因習村にて行われる『豊穡の儀式』で乳神様から祝福を受けた妻のようすがおかしい](#)
- [因習村にて行われる『豊穡の儀式』で乳神様から祝福を受けた妻のようすがおかしい2](#)
- [膨乳医療の裏施術を受けた女が乳改造虫の苗床となって人々を授乳洗脳していく](#)
- [知らぬ間に実の母から乳調教を受けていたヒロイン『サマーイエロー』は悪の組織の女幹部に敗北する](#)
- [悪堕ちしたサマーイエローがかつての仲間を手につけて市民洗脳の儀式を実行させる連鎖堕ちモノ](#)
- [治験に参加した男子大学生が巨根爆乳シーメール化して友人を巻き込んでいく連鎖堕ちモノ](#)
- [膨乳医療で淫らに変貌するアイドルとそれを後押しするプロデューサーの話](#)

Zuftha lactovora に関する観察記録報告書

トルコ東部にて再発見された、乳腺内共生性の軟体生物「ズフタ・ラクトヴォラ」に関する初期報告書。美容効果を目的とした導入例が増加するなか、その実態とリスクについて、研究者の視点から淡々と記録されていく。——これは、快楽と共に排出される、美の副産物。

- 提出者

山神 隼人 (第四医科大学 寄生共生生物研究室)

- 提出日

2025 年 7 月 20 日

- 分類

制限付き医学生物資料 / 第II類未確認共生種

1. 概要

本報告書は、2024 年にトルコ東部・ワン湖周辺にて再発見された軟体共生生物 *Zuftha lactovora* (ズフタ・ラクトヴォラ) 通称: ズフタに関する、初期観察および導入事例の整理を目的とする。

本種は、乳腺組織内に定着することを前提とした特異な共生機構を持ち、特に若年女性の間で美容的効能を目的とした非医療的導入が急増している。本稿では、その形態・ライフサイクル・ホルモン影響・安全性について現時点の知見を記述する。

2. 分類と命名

- 学名

Zuftha lactovora

- 通称

ズフタ (現地語で「柔らかいもの/宿るもの」の意とされる)

- 生物分類 (暫定)

真軟体動物門 → ラクトペトラ亜門 (仮設)

- 形態

成熟個体は体長 20~30 mm、色調は半透明の淡桃色。柔軟な節構造を持ち、湿潤環境下では蠕動的に体をくねらせる。外骨格を持たず、水分含有率が極端に高く、蛆虫に類似した外見を呈する。観察者によっては生理的嫌悪を催す外観とも記録されている。

3. 定着機構と生理影響

ズフタは注入後 48~72 時間で宿主の乳腺導管内に定着する。体表から分泌される粘着性の膜質タンパクが乳腺上皮に結合し、軽度の炎症反応を引き起こすが、速やかに抑制される。その後、ズフタは微細な口器様構造を用いて乳腺内分泌細胞と半融合状態に入り、宿主の内分泌調節ネットワークに段階的な干渉を開始する。

この共生機構は、いわば内因性ホルモンの微細な書き換えに近く、免疫系からの拒絶を最小限に抑えたまま、宿主の生理をズフタの生存に「最適化」する方向へと導いていく。

3.1. 内分泌系への作用

共生開始から約 2 週間で、以下の内分泌的变化が報告されている。

- エストロゲンの分泌上昇 (平均 1.7~2.4 倍)
- 乳房の肥大化、乳腺容積の増大
- 皮膚弾力性の上昇、脂肪分布の再構成

ウエスト部の脂肪減少と、臀部・大腿部への再配置が顕著

- プロラクチン誘導性の軽度母乳分泌（非妊娠状態での分泌）

なお、分泌液の粘性・色調には個人差があり、一部導入者からは「特有の甘味」「花香様の香気」を伴うとの報告もあるが、成分的な実証はなされていない

3.2. 神経・心理面への影響

共生期間中盤（3～5 ヶ月目）には、被験者の約 68% に以下の心理的・行動的变化が観察されている。

- 軽度の多幸感

被験者主観での理由のない幸福感の訴え

- 性的活力の上昇

性行動の頻度増加、性的思考の優勢化

- 他者への親和性増大、対人関係の積極性上昇

とくに同性間での共感性が強調される

これらの変化は、脳内報酬系に対する持続的な神経伝達物質の干渉、特にドーパミンおよびオキシトシン経路の活性化によるものと推測されている。ズフタが直接的に神経細胞へ作用する痕跡は現在のところ確認されていないが、乳腺組織内からの微弱な神経修飾ペプチドの分泌が観測されており、これが中枢神経系へ間接的影響を及ぼしている可能性がある。

なお、こうした心理的变化は一部の導入者において、離脱への恐怖や再導入の強い希求といった依存的行動として表出しており、現地メディアでは「ズフタ症候群」とも称されるようになった。都市部では SNS を通じてズフタ導入者同士の密接な共同体的ネットワークが形成されており、自己肯定感の劇的な上昇と引き換えに、非導入者との間で社会的断絶を生じさせる例も報告されている。

これらの兆候は、単なる生理変化を超えた心理的再構築 (re-structuring of identity) を伴う可能性があり、共生の倫理的・社会的評価には今後さらなる慎重な検証が求められる。

4. ライフサイクル

ズフタの生活環は単回型・非増殖性であり、宿主内での自己複製・分裂は一切観察されていない。生物個体は、あらかじめ「1年で死に至る」ように代謝経路が設計されているかのような振る舞いを示し、その点においてプログラムの死滅 (programmed extinction) の性質を有する可能性がある。

4.1. 共生期間

平均滞在期間 10～13 ヶ月

- ズフタはこの期間を通じて、宿主乳腺内の代謝物を選択的に利用しつつ、自らの活動性と宿主のホルモンバランスを相互に調整することで、双方にとって快適な環境に「最適化」する
- この共生状態は終末期に入ると自壊的傾向を示し、生物の体積は縮小し、活動が低下する

4.2. 排出と死

排出は自律的な代謝経路の崩壊によって誘導されるとされ、外的刺激なしに自然に開始される。ズフタは乳腺導管を通じて乳様分泌物とともに排出され、排出直後は一時的に活動を維持するものの、12～24 時間以内に完全に死滅する。この非繁殖性かつ不可逆なライフサイクルは、生物よりもむしろ共生型バイオデバイスに近い形質を示す。

5. 現地での使用実態

現地調査によれば、ズフタの導入は主に非医療系の美容ルートにて行われており、以下の傾向が確認されている。

- 導入者の主な年齢層は 18～29 歳の女性で、都市圏在住者に集中
- 初回導入者の約 4 割が、1 年後に再導入を希望 (実質的なリピーター)

- 「乳腺フェロモンセラピー」や「内分泌エステ」などと称する擬似医療的マーケティングが行われている
- サロンによっては導入後の心理的变化を肯定的に演出するため、香り付き補助剤やカウンセリングを組み合わせたサービスが提供されている

SNS ではズフタ導入体験を共有する匿名コミュニティが複数確認されており、「#ズフタ期」「#蜜胸」などのハッシュタグが一部若年層で流行。こうした文化的受容は、「共生 = 美德」という価値観を静かに浸透させつつある。

6. 総評と今後の課題

Zuftha lactovora は、生物としての振る舞いを保ちながらも、人間の乳腺環境に最適化された高度に従属的な共生体であり、共進化的関係が疑われる特異種である。

その共生は、宿主に物理的・生理的な変化と同時に、心理的な再構築を促す点において、単なる美容技術とは一線を画する。しかし現時点では、ズフタに関する公的ガイドラインは存在せず、導入者の安全・倫理・依存性リスクは事実上サロンと個人に委ねられている。

各国の公衆衛生機関はこの問題に対して沈黙を守っており、自然発見物であることによる制度的回避が続いている。ズフタが「次の段階」に達する前に、その存在と利用をめぐる議論は、科学・倫理・文化の全域において改めて再構築される必要がある。

7. 参考文献 (架空)

1. Duran, L. et al. “Parasitic Symbionts in Anatolian Folk Medicine.” *Journal of Ethnobiology*, 2024.
2. Kobayashi, H. “Zuftha as Non-Reproductive Symbiont.” *Parasitologia Experimental*, Vol. 17, 2025.

3. World Health Symbiosis Council. “Preliminary Guidelines on Non-Human Lactic Co-inhabitants.” WHSC Doc #347/INT, 2025.

違法な膨乳改造医療によって変わりゆく妻—— 何も知らない夫は変化を受け入れながら濃厚な 性生活を送る

妻が美しくなっていく——あるいは、別の何かになっていく過程を描いた官能SF。

謎の共生生物「ズフタ」によるホルモン調整と肉体改造を受けた妻は、日々官能的な美しさを増していく。夫である和也はその変化に戸惑いながらも、新たな妻の魅力に引き込まれていく。

医療行為と快楽の境界が溶けていく施術室、妻の変貌する肢体、そして周囲に広がっていくズフタ感染——心地よい背徳感と官能的な肉体変化を描いた作品です。

和也（かずや）が最初に異変に気付いたのは、7月の半ば、妻の遙（はるか）が新調した黒いレースのブラジャーを洗濯かごから見つけたときだった。

「これ……確か先週のデパートで買ったやつか……」

手に取った下着は遠い記憶の中のもののよう感じられた。深い谷間を強調するよう設計された、針金入りの攻めているデザイン。結婚前の遙が好んで着けていたようなタイプだ。絹のストラップが指の間からこぼれ、ぽたりと洗面台の縁に当たる音が妙に生々しかった。

ここ2年ほど、妻は出産後の体型変化を気にして、スポーツブラのような機能性重視の下着ばかりを選んでいたはずだ。和也は眉をひそめ、化粧台の引き出しを開けてみた。

「……ない？」

常にストックしてあったノンワイヤーの肌着が、すっかり消えていた。代わりに、薄手のレースやシースルーの素材が乱雑に詰め込まれている。一番下には、先月の結婚記念日にも着なかった黒のガーターベルトまでしまっていた。

「何だこれ……いつの間に」

冷蔵庫を開けると、いつもの低カロリー食材の代わりに、チーズや生クリームが所狭しと並んでいる。ビンのラベルから判断するに、全て高級食材専門店のものらしい。まな板の上には今夜のディナーの下準備と見える牛フィレ肉が、室温解凍中のようだ。

「こんなカロリー計算どうなってんの？」

ふとりビングに目をやると、テーブルの上には開封されたばかりのワインボトル。つい先月まではストイックに糖質制限していた妻の姿が、まるで嘘のようだった。

「おかえり、和也くん」

突然背後のドアが開き、仕事から帰ってきた遙の声がした。振り返った和也は、目を見開かずにはいられなかった。

「な……！その格好は……？」

いつものジーンズとTシャツではなく、膝丈を大幅に超えるスリットの入ったスカート。上はノースリーブのトップスで、肩から鎖骨がくっきりと露わになっている。肌の露出が増えただけでなく、歩くたびに胸が弾むのがはっきり分かるような、身体のラインを強調する着こなした。

「ん？珍しい？デパートで見つけて、つい買っちゃった♪」

そう言って片手にショッピングバッグを提げたまま、遙は和也の前でくるりと回って見せた。スカートのスリットからは、先ほど見たガーターベルトに繋がるストラップがちらついていた。

「いや……似合ってるけど」

自分の声がどこか上ずっているのを感じた。確かに、最近の妻はとても綺麗だ。出産後に垂れ気味だった胸はふっくらと立ち上がり、腰周りも引き締まっているように見える。以前より化粧も濃い目になり、口紅の色も鮮やかになった。

「なんか……オシャレに目覚めたみたいだな」

和也が苦笑いで返すと、遙はくすつと笑ってキッチンに歩いていった。長い脚を交差させる仕草が、何故か以前より意識を引く。

「今日は特別なお肉を買ってきたの。リビングで待っててくれる？ちょっと主張のある赤ワインもあわせたから」

妙に色気を帯びた口調でそう言うと、妻はふいに和也の胸に手を当て、軽く押し倒すようにソファへと導いた。その動きには、かつてなかったような積極性があった。

「お、おう……」

ソファに腰掛けながら、和也は目の前の光景を消化し切れずにいた。遙はワイングラスを傾けながら、足を組み替えて座る。むっくりと突き出した太ももが、スリットから剥き出しになる。

(何だか……別人みたいだ)

和也は思わず目を泳がせた。18歳で付き合い始め、22歳で結婚した妻——そのはずなのに、今日の前にいる女は、どこか初めて会ったばかりの女性のように新鮮だった。

「ねえ、和也くん」

突然、妻が甘ったるい声で名前を呼んだ。グラスの縁に付いた赤い唇跡が、不自然に鮮やかに見える。

「最近、私のことどう思う？正直に言って？」

そう聞きながら、遙はゆっくりと体を傾け、和也の膝に手を置いた。匂い立つ香水の調べが、部屋の空気を重くする。

「そ、そういうこと突然聞かれても……」

「昔より可愛くなったって思わない？」

目尻を下げて微笑む妻の顔には、見覚えのあるような無いような、不思議な妖しさがあった。

「まあ……確かに、最近の遙は綺麗だよ。化粧とか服装もセンス良くなったし」

言葉を選びながら答えると、妻の目がきらりと光った。

「もっとよく見てよ、和也くん」

遙は突然、和也の手を掴んで自分の胸に当てた。薄い布地越しに、熱を持った柔らかな膨らみが伝わってくる。

「形も良くなってるでしょ？昨日計ったら、カップサイズもひとつ上がったたのよ」

その声には、どこか見せびらかすような、自慢げな響きがあった。和也の掌に押し付けられた乳房は、確かに以前より張りがあり、先端が硬く尖っているのを感じた。

「あの……いきなり何だよ」

「怖がらなくていいの。ただ……」

遙が和也の耳元に唇を寄せ、囁く。

「私、最近……すごく快感に弱くなってるみたい。体中が敏感で…和也くんに触れられるだけで、ゾクゾクしちゃう」

吐息が鼓膜を舐める。和也の股間が、理性とは別に反応する。

「今日の夜……いつもよりじっくり……あなたとゆっくりしたいな」

そう言い終わると、妻はふいと立ち上がり、ワイングラスを持ったまま寝室へと歩いていった。ゆらゆらと揺れる腰の動きが、不自然なくらいに艶めいていた。

和也はただ、開けっ放しになったドアを見つめるしかなかった。その奥からは、シャワーの音が聞こえ始めていた。

(一体……何が起こってるんだ？)

首を振りながら、彼は残されたワイングラスに手を伸ばした。ずっしりとしたボトルは、確か去年のボーナスでようやく買った高級品のはずだ。

冷んやりとしたグラスに唇を当てた瞬間、ふと気になった。遙の首筋に、先週まではなかった小さな赤い斑点が、三つ並んでいたことを。

ベッドの中で遙のあまりにも異様な変化は、思考が追いつかないほどだった。

彼の上に跨がった遙は、薄手のシルクのナイトガウンを着ている。だが、それはほとんど意味を成していない。生地が汗と愛液でぐっしょりと湿り、胸先のピンクの尖端が透けて浮かび上がっている。彼女の呼吸は荒く、頬は火照り、唇は艶やかに濡れて微かに開いている。

「和也くん……早く……もう、待てないの……」

ふわりとナイトガウンを脱ぎ捨てる音。そして、むちっとした肉の弾ける音。遙の身体は、以前の彼女とは明らかに違っていた。ウェストは引き締まり、腰のくびれはより深く、そして胸は——もっともっと張りつめ、重力に逆らうように高く突き出ている。

「はぁ……んっ……♡」

和也のズボンが剥がされ、硬く勃起した男根が剥き出しになる。遙はそれを見て、はっとはにかんだ表情を浮かべ、すぐに貪るような眼差しに変わる。

「すごい……和也くんのおっきい……♡こんなに興奮してるんだ……」

ぬるっ……♡

いきなり彼女の手が和也の男根を掴み、締め付ける。グリグリと指が根元から先端まで這い上がっていく感触に、和也は思わず「ぐっ……！」と声を漏らす。

「ねえ、どう……？私の手、気持ちいい……？」

「ああ……すげえ、なんだ……遙……そんな握り方、したことなかったぞ……」

「ふふ……♡私だって……最近、すごく……こういうの勉強したんだから……」

ちゅっ……♡

彼女の口が、いきなり和也の亀頭に吸い付いた。舌先で鈴口を舐め上げ、ちゅぷちゅぷと音を立ててしゃぶり込む。唾液が溢れ、男根全体をぬらぬらと濡らしていく。

「んちゅ……れろ……♡おいしい……和也くんの味……♡」

あまりの快感に、和也は腰を跳ね上げそうになる。

「ちょ、やべえ……遙、そんなに上手に……くう……！」

「どう……？私、上手になったでしょ……？もっと……もっと気持ちよくしてあげる……んぶ……♡」

ずるずるっ……♡じゅぶ……♡

深々と喉まで咥え込む妻の口内。その熱く締め付ける感覚に、和也は脳天を衝かれるような快感に襲われる。

「うおっ……！やべ……すぐ……遙、離して……！」

「んあ……♪ ダメ……飲ませて……？」

とろっ……♡

離れた口から糸を引く唾液。彼女は恍惚とした顔で、舌を這わせながら、今度は自分の胸を押し付けてきた。

むにっ……♡

「和也くん……私のおっぱい、触って……？すごく、敏感になっちゃって……んっ……♡」

むにゅっ……♡

彼女の張りつめた乳房が、和也の掌に収まりきらないほどに膨らんでいる。乳首は硬く尖り、触れただけで彼女の体がびくんと震える。

「あ……んっ……！気持ち、いい……♡これ、和也くんに触られるの……すごく……んあっ……！」

「……嘘だろ、こんな声……今まで聞いたことなかったぞ……？」

「だって……私、今……すごいの……体中、火照っちゃって……♡」

じゅぶ……♡ずりゅ……♡

遙は自ら腰を動かし、和也の男根を自分の割れ目に擦りつける。すでに愛液でびっしょりになったその部分は、熱く、脈打っているのが分かる。

「はぁ……和也くん……入れて……♡もう、我慢できない……お願い……！」

「お、おい……まさか、自分から……」

「ん……♡ダメ……？」

ずぷぷっ……！

いきなり、彼女が腰を落とした。ぐちよりと深く呑み込まれる感触。和也は思わずのけぞる。

「うおおっ……！遙……！んぐ……！」

「あ……んっ……！くっ……おっきい……♡でも、気持ちいい……♡ああん……私、こんなに……感じたことない……！」

ずちゅ……ごぷっ……♡

遙の腰が激しく上下し、膣内がぎゅっと締め付けてくる。その度に、和也の男根は熱い肉壁に揉まれ、遙か彼方へと引きずり込まれていくようだった。

「んあっ……！あっ……！くう……♡和也くん……私、すごい……私……んああっ……！♡」

「あ……遙……お前、すげえ……声……！」

「だって……気持ちよすぎて……んあ……！頭……真っ白……♡」

ずりゅっ……！ずりゅんっ……！

彼女の腰振りはさらに激しくなり、ベッドがきしむ。膣の奥で何かが蠢き、まるで生き物のように和也の男根を締め上げてくる。

「んふああっ……！イク……私、イク……！♡和也くん……膣内で……♡」

「くっ……お前、まさか……またイクのか……？」

「うん……んああっ……♡もう……何回も……♡和也くんと……気持ちよくなり
たい……♡♡♡」

じゅるっ……！にゅぷっ……！

彼女の膣が痙攣し、熱い液体が溢れ出す。その瞬間、和也も耐えきれずに射精して
しまう。

「うおおっ……！遙、出す……っ！」

「あ……ああん……♡熱い……♡膣内で……感じてる……♡」

どぶっ……どぶっ……♡

深く注ぎ込まれる精液に、遙は目をつむり、震えながら受け入れる。

そして——その後も、彼女の貪欲な欲求は終わらなかった。

朝の光がカーテンの隙間から差し込み、和也はゆっくりと目を覚ました。昨夜の
激しい性交の余韻がまだ体中に残っている。彼はベッドの中で身を起こし、隣に遙
の姿がないことに気付く。

「あれ……遙？」

ふと、クローゼットの前で何かを着替えている遙の姿が目に入る。彼女は今日も
派手めな服装を選んでいるようだった。ショート丈のスカートに、胸元が大きく開
いたトップス。そして、肌に密着するような生地タイツ。彼女のスタイルは以前
よりもくっきりと浮き出ており、まるでファッションモデルのようなプロポーショ
ンになっていた。

「おはよう、和也くん」

振り向いた遙は、いつもより濃いめのメイクを施している。目の周りにはシャド
ウがはっきりと入り、唇は鮮やかな赤に染められている。

「ん……おはよう。え、その格好……どこか行くの？」

和也が聞くと、遙は少しだけ笑みを浮かべて答えない。

「ちょっとね……♡美容のサロンに行ってくるの♡」

「美容……サロン？」

最近、妻も子供も変わったことばかりだが、美容サロン通いなど聞いたことがない。遙は「時間ができたから」とか「女友達に勧められて」とかしかならず、具体的な店名や場所を教えてくれない。

「どんなサロンだよ。そんなにかわいくなって何するんだ」

半ばからかいながら聞いてみると、遙はきらりと目を輝かせて答える。

「もっともっと……」

「え？」

「もっともっと、綺麗になりたいんだもん♡」

目の前で遙がくるりと回る。スカートの裾が軽やかに舞い、タイツに包まれた足のラインがくっきりと浮かび上がる。その仕草は、もうかつての妻のものではなかった。

「……ま、まあ、やりたいことをやってくれればいいけどさ」

和也は内心、不安のような、戸惑いのようなものを感じながらも、自分に言い聞かせる。

(不倫とか……そういうわけじゃないだろ。遙は俺のことが好きなんだ。こんなに俺を愛してる妻が、他の男になんて……)

しかし、遙のスマホがピコピコと通知音を立てる。彼女はそれをちらっと見て、何やら急いで返信を打っている。顔には、気持ちよさそうな笑みが浮かんでいる。

「じゃあ、行ってくるね♡夕方には帰るから」

「あ、ああ……」

ドアが閉まる音。和也は一人残され、ふと昨夜のことを思い出す。

彼女のあまりにも熱烈な性欲。異常なほどの敏感さ。そして、何よりも――あの肉体の変化。全てが謎に包まれている。

(あの首の赤い斑点……何だったんだろう……)

ふと、テーブルの上に置き忘れた遙のメモ帳が目に入る。普段は絶対に見ないが、今回は何となく気になって手に取る。そこには、見慣れない単語が書かれていた。

『ズフタ 次回注入 14:00』

インクの跡はまだ新しい。さっき書いたばかりらしい。

「……ズフタ？」

聞いたことのない言葉。和也はスマホで検索しようとするが、思いとどまる。

(いや……妻のプライバシーに立ち入るのはよくない。きっと何かの美容治療だろう。リンパマッサージか何かだ)

そう自分に言い聞かせ、メモ帳を元の位置に戻す。しかし——心の奥で、何かが彼を苛み始める。

遙が帰ってくるまでの間、彼はただ、変わり続ける妻の変化に思いを馳せるしかなかった。

消毒液の匂いが鼻を刺す施術室。リクライニングチェアに仰向けに寝かされた私は、緊張で胸を波打たせていた。

「ふう……っ」

薄手のガウンをはだけさせ、片方の乳房を露出する。冷たい空気が肌に触れ、乳首がこちらの意思とは無関係に硬く膨らんだ。

「梶原さん、今回も左乳から注入ですよ」

白衣を着た女医の声。冷たい手袋越しに、私の胸肉が優しく持ち上げられる。

じゅるっ……！

消毒液を含んだコットンが乳輪を撫でる。分泌孔を広げるための刺激なのだろうか、ぐりぐりと円を描く指圧に、思わず背筋がびくんと跳ねる。

「んっ……！先生、それっ……すこし……あ……」

「大丈夫です、もう慣れていきますよね？ズフタ導入は3回目ですから」

そう言われて頷く。頭では分かっている。これはただの医療行為だ。美容と健康のための共生体移植——乳房内に住み着くあの小さな生き物が、私の体を美しくしてくれるのだ。

だが。

ちくっ！

「ひゅんっ……！！♡♡」

鍼が乳首の脇に刺さる。中空針の先から、ぬるりと温かいズフタのコロニーが流し込まれる。その瞬間、体中の神経が一気に乳房へ集中するのを感じた。

びくん！びくっ！♡

「あ、あぁっ……♡だめ、すごい……これ……んうっ！♡」

胸の内側で何かが蠢き始める。まるで蜂蜜を注がれたかのように、じわじわと甘い熱が乳房を這い回る。ズフタたちが導管に巢食い、生体組織と癒着していく。

「ほら、深く息を吸って……共生が始まりますよ」

「はぁ……はぁ……っ♡先生、熱くて……私、なんか……あんっ……！♡」

胸の奥で炎症反応のような疼きが広がる。普段なら痛みと知るべき刺激が、なぜか快感に変換されている。ズフタの出す神経作用物質が、私の脳を欺く。

どぶ……どくっ♡

「あゝっ……！♡んあ……っ、乳房が……ひくっ……ひい……！♡♡」

乳房の奥で脈打つ感覚。まるで何か生き物に吸い付かれたような、くちゅくちゅとした吸引力。おかしい声が喉から零れ出るのを、私は必死で噛み殺す。

「相性がいいみたいですね。ズフタの定着率、90%超えています」

「そ……そんな……私の乳内……んっ……気持ち良すぎて……だめえ……♡」

もう理性ではどうにもならない。太ももが痙攣し、ガウンがぐしゃりと濡れる音がした。知らないうちに愛液が垂れていた。

ちゅぷ……ちゅるるっ♡

「次は右乳です。そろそろ分かりますよね？両側同時の刺激は相当強いですから」

「待って……あゝっ……！♡んんんっ……！！♡♡♡」

もう一方にも針が刺さる。左右から押し寄せる快感の波。ズフタたちが行き渡った乳腺が膨張し、胸が目に見えてふくらんでいく。

ぷるん……ぷるるっ♡

「すごい……張って……る……あゝっ、あゝ あっ……！♡」

乳房が熱く重くなり、乳首からは透明なリンパ液がじんわり滲み出す。私は狂ったように腰を震わせ、ガウンを握りしめる。

「駄目……こんなの……治療なのに……あゝっ……♡頭おかしくなりそう……んおお……！♡♡」

女医の手が、ズフタの循環を助けるために乳房を揉み始める。

むにゅ……ちゅぷっ♡

「いやあっ！♡そこ……あつ……あついの……っ！♡」

絞り出すような声。乳房の中で無数の微小生物が蠢き、快感のシグナルを全身に撒き散らす。子宮の奥で熱いものが脈打ち、私は理性の糸がプツンと切れるのを感じた——

「あゝ あああっ……♡♡♡イっちゃう……イっちゃうっ……治療中なのに……らめ……っ！♡」

びくんっ……♡びくっ……！！♡♡

背中を反らせ、ガウンを擦りつける。椅子の上で私はみだらに身悶え、ズフタ導入という名の絶頂に堕ちていった。

施術記録には、冷静な数値が並ぶ。

《ズフタ定着率97%・ホルモン反応良好・生体適合度Sクラス》

だが誰も知らない。この治療台の上で、私は医療行為と称した快楽に溺れ、人妻としての羞恥心をズフタの餌食にしていたことを——

和也は、朝食のコーヒーを啜りながら窓の外を見ていた。朝日を浴びて、昨日よりもさらに輝いて見える遙が、タクシーに乗り込むところだった。

「行ってくるね。今日もサロンだから、夕方は遅くなるかも」

彼女は窓越しに手を振り、先週買ったばかりのシルクのブラウスがきらりと光る。首元につややかに揺れる鎖骨——あのあたりに、確かに見た赤い斑点は、いつの間にか消えていた。

カップを置き、和也はテーブルの上に転がっていた遙のスマホを目にする。ロック画面には見知らぬ女の子たちとの集合写真。みな、胸元の開いた服を着て、どこか恍惚とした表情で写っていた。

(あれは……確か、遙のママ友だったか)

画面がチラッと光り、通知が表示される。

『明日のズフタ体験会、キャンセル待ち3人増えました！』

「ズフタ……」

未読通知は一瞬で消え、再びロック画面に戻る。綺麗にメイクアップされた遙の笑顔が、眩しいほどに映っている。

洗い場に向かうと、遙が今朝使ったというコップが二つ。一つはいつものマグカップ、もう一つは見慣れないグラス——底に、僅かにピンクがかった液体の痕が残っていた。

「……また、何かのサブリかな」

冷蔵庫を開けると、野菜室には謎の瓶が収まっている。ラベルには「Lv.3 拡張用」と手書きの文字。

扉を閉め、和也はふと、昨夜のことを思い出す。

ベッドで絡み合う遙のあまりの熱情。以前なら絶対に言わなかった淫らな言葉。あの時、彼女の胸に触れた感触——他では味わえない、異常な張りや弾力。まるで若返ったような肉体。

(あのサロン……本当にただの美容治療なのか?)

居間のソファに腰を下ろし、和也はテレビをつけた。ローカルニュースで、街の風景が映る。

『——近隣住民からの通報により、無許可医療行為の疑いで捜査に入っています』

画面には、どこか見覚えのあるビルの外観。玄関先で、遙とよく似た服装の女性たちが慌ててタクシーに乗り込む姿が一瞬映った。

チャンネルを替える。和也の頭の中を、今朝の遙の言葉がぐるぐると回る。

「私、最近……みんなに勧めてるんだ。すごく良いものだからって」

洗面所の鏡に、自分の顔が映っている。何か変だ——確かに、最近の遙は美しくなった。だが、まるで別の生き物に寄生されたかのように。

携帯が鳴る。上司からの出社を促すメール。

「ああ……行かなきゃ」

ドアを閉めるとき、和也はふと、隣の奥さんとすれ違った。彼女もまた、遙と同じ香水の匂いがした。そして、首の後ろに——あの赤い斑点があった。

奥付

- 作品名: ズフト——宿主を「完璧なメス」へと誘う乳腔共生体 (体験版)
- 著者: あれぐろもと
X: @AllegroMoltoV (<https://x.com/AllegroMoltoV>)
- 表紙イラスト: ハル
X: @haru04021992 (<https://x.com/haru04021992>)
- 発行者: あれぐろもと
- 発行日: 2026 年 2 月 12 日
- 版: 第 1 版
- 連絡先: contact@allegromoltov.jp

© 2026 AllegroMoltoV. All rights reserved.

本書の内容（文章・画像等）の無断転載、複製、配布を禁じます。